[Prologue　プロローグ](file:///C:\Users\%E9%A2%9C%E5%BB%BA%E5%BF%A0\Documents\%E5%B0%8F%E8%AF%B4\%E5%A4%84%E5%88%91%E5%B0%91%E5%A5%B3%E6%97%A5%E6%96%87%E5%8E%9F%E7%89%88\(%E7%94%9F%E8%82%89)5%E5%87%A6%E5%88%91%E5%B0%91%E5%A5%B3%E3%81%AE%E7%94%9F%E3%81%8D%E3%82%8B%E9%81%93%EF%BC%88%E3%83%90%E3%83%BC%E3%82%B8%E3%83%B3%E3%83%AD%E3%83%BC%E3%83%89%EF%BC%89%EF%BC%95_%E2%80%95%E7%B4%84%E6%9D%9F%E3%81%AE%E5%9C%B0%E2%80%95_(GA%E6%96%87%E5%BA%AB%20-%20%E4%BD%90%E8%97%A4_%E7%9C%9F%E7%99%BB%20-%20%E5%89%AF%E6%9C%AC\OEBPS\text00010.html#toc-001)

　久しぶりに、夢を見た。

　日本の行ってもいない学校の教室の夢だ。

　着ている制服は、みんな違う。学ランだったり、ブレザーだったり、セーラー服だったり、制服というわりにはてんでバラバラで不揃いなのに、なんでか違和感がない。

　なによりおかしいのは自分の格好で、神官服なんてものを着ている。

　学校で、なんでそんなコスプレじみた格好をしているのか。不思議に思うべきなのに、 も指摘をしない。

　クラスにいる友達のみんなと笑顔で会話をしていると、学ランの少年が気楽な口調で聞いてきた。

　なあ、あの子は、いつ来るんだよ。

　あの子。問われた人物が誰かわからずに、小首を げる。

　ほら、あそこの子。

　彼が指さした先を見ると、一つだけ、ぽっかりと空いた席があった。

　近寄ってみると、机には花が置いてあった。白い布で造られた、単純な造花だ。

　ここにいるべきなのは、誰か。

　うん。

　 んで、答える。

　もうすぐ、連れてくるわ。

　自分と、一緒に。

　そこで紹介しよう。

　その子とはとても仲がよくて、二人の間に秘密なんてないような間柄だ。相手が笑えば自分が しく、自分が嬉しければ相手も嬉しい。自分は相手の悲しい過去を知っていて、相手も自分の悔しかった過去を知っていて、だからこそお互い認め合っている。

　そんな親友なのだと、授業が始まるのを待ちながら夢の中で歓談を続けた。

＊＊＊

　大陸の西のかなた。聖地にそびえる大聖堂の、その奥の奥。

　余人の入ることのできない内陣で の頂点、大司教エルカミは をついて、祈りの姿勢をとる。

「世界の救世主にして、文明の復興者。我らが偉大なる『主』よ。あなた様のご帰還の儀、滞りなく進んでおります」

　教典を置くと、導力の文字がつづられる。

　通信魔導だ。

　エルカミはそれを読み取り、震える。

　──近々、四大 の封が解ける。

　四大 の封印。

　少し前に、小指が放たれただけで各地で無視できない被害が広がっている。その封印が解ければどうなるのか。

　西はいい。最大にして最高最速であった偉大な純粋概念【龍】は完全に討滅され、真っ白な塩となった。彼を滅ぼした『塩の剣』は によって厳重に管理されている。逆に管理者を失くした龍脈は不定期に竜害と呼ばれる現象を起こすようになったが、名残でしかない災害は許容範囲内に収まっている。北の【星】に至ってはなんの問題も起きていない。

　だが東と南は、 そのものが生き続けている。

　不意に様子を見守る聖像の一つが、けらけらと笑い始めた。

　ここに並んでいるのは、ただの聖像ではない。教会に置いてある祭壇と同じく、超距離の通信を可能とする導器だ。

　どこからか、通信をつないだ人物が気安くエルカミに語り掛けてくる。

『おぬしも大変だのう。【 】になってまで奴のご機嫌取りとは、健気なことじゃ』

　あからさまな だ。エルカミはなにも言わずに、黙殺する。

　しかし相手はひるむこともなく言葉を続ける。ここに通信をつなげるのは【 】だけだ。

『 は動けぬ身じゃ。会話を楽しむくらいよかろう？　はよう口をきけ』

　口調が、変わっている。声も知っている者とは違う。だが間違いない。

「……【防人】か。グリザリカ王国はいいのか？」

『ああ、掃除は終わった。まったく、奴の弟子もいいタイミングでオーウェルを殺してくれたものだよ。時間の繰り返し様様じゃな。あとは旅を経て一段と成長しておろう愛しの妹の帰還を待つだけじゃ』

　オーウェルが死んだ。

　同じく大司教の座にいた聖職者の死は、少なからぬ感傷をエルカミに与えていた。